

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑨

浅田 朋子

昨年9月から、幼稚園に通い始めた双子。6月に保護者説明会があったが、説明が大雑把で日程の詳細がよくわからなかった。しかし登園初日、教室の壁に日程の詳細が張り出されており、親たちはどういうスケジュールでいくのかやっと知ることができたのである。

最初2日間は午前8時から10時15分までの前半グループと10時30分から12時15分までの後半グループに分かれて親同伴で慣らし保育が始まり、3日目はクラス全員で12時半まで、親は園内で待機する。それから昼食後の14時半まで、最後に16時半までの通常保育となる。

子供が徐々に園に慣れていくように考えられたなかなか良いスケジュールだが、働いている両親にとっては3日間休みをとらないといけないのですこし厳しいようだ。

教室につくと、親はみな緊張した面持ちで子供を見守っていた。アンナ先生とアデレ先生は、すぐに子供におもちゃを与えたり話しかけたりして優しく迎え入れてくれた。双子も最初はクラスに入るのをためらっていたが、たくさんのおもちゃをみて楽しそうに遊び始めた。初日は新しいことだらけなので泣き出す子供もなく、みんな楽しそうに過ごし、あっという間に2時間が過ぎた。親は心配と緊張で初日からすでに疲労困憊である。

2日目もこんな感じで何事もなく過ぎたが、異変が起きたのは3日目である。

3日目、園舎に入ると「ぎゃあー！ー！ー！！！！」という泣き声が響き渡っていた。双子もビクッとして急に不安な顔になった。教室にい

くと1人の男の子が教室の前で泣きわめいていた。「パオロ、泣かないで遊ぼうよ、ほら、先生も呼んでるよ！」とお母さんが必死でなだめていた。他の親たちは「……うちの子も泣くんじゃないかな…頼む！泣き止んでくれ！」というような表情でパオロくんたちを眺めている。他の子たちを見ても何となく覇気がなく不安そうである。今日から親が外で待機する雰囲気を感じているようだ。その雰囲気をみて先生が「親御さんは教室の外の、子供が見えるところで待機してください」と指示した。本当は園庭で待機なのであるが、一旦教室の外で待機させ、様子を見るつもりなのだろう。

親がぞろぞろと外に出ると子供もついてきた。「ほら、教室にもどるのよ」と親が促しても「なんで？」としつこく親に引っついてくる子供たち。何人かは平気な顔で遊んでいるが、楽しそうではない。たまにちらちら親を見て、ちゃんと親がいるかどうか確認している。

「さあー、みんなで遊びましょう！ほらこっちにおいで～～！車があるよー、ブンブーン！」と先生も必死である。どうにか全員教室に入れ、それぞれにおもちゃや本をあたえつつ、フル回転で先生は子供一人一人に気を配っている。

しかし、みな遊び始めたものの、しーんとしてまるでお通夜みたいである。そして、そのお通夜感をさらに増しているのがフランス人のミラちゃんである。金髪で青い目、ぷっくりとしたほっぺたはお人形のようにかわいらしい。しかし、その可愛い奥二重の腫れぼったい目からはらはらと涙を流し、声を出さずに泣いているのである。積み木をして

いる手は細かく震え、なかなか上手く積むことが出来ない。

「みて、ミラちゃん。なんて悲しそうに泣くんやろ…」私が夫に言うと、「フランス人は悲しみの表現が奥深いね…」と言った。そうだな、イタリア人にはない感性かもしれないな。

悲しいフランス映画のヒロインの隣で、私の唯一のママ友のレーナちゃんの息子、イタリア・ロシア人ハーフの双子(かつての弱小部隊)がおもちゃを取り合い暴れていた。彼らはもはや弱小とは言いがたい、強面なロシア戦士へと成長している。「もういいんちゃう？」と言うくらい休む間もなく山や海へと連れ出す習慣は今も続き、ほとんど家にいない。そのレーナちゃんの努力が実り、1歳前にはあんなにフニャフニャでハイハイもままならなかった腕や足はいまやローマの地を戦車のようになり強く歩んでいる。通いだして1年のスイミングでさらに筋肉を増強中だ。もみ合うロシア戦士の仲裁に入ったアデレ先生は二人に腕をとられて、まるで捕虜のようである。



【近ごろお気に入りの黒板あそび】

しばらく教室内でどうにか遊んでいた子供たち。しかし「…ママ…、ママ——！！」と1人が教室から脱走した。それにつられたように何人かが泣き出し、教室の外にいる親のもとに走っていった。

「ここイヤ！」「ママかえろう！！」と口々に言い出して大騒ぎである。親も慣れていないので、もうあたふたするばかり。どうにかなだめて教室に戻そうと必死である。私たちの双子も泣きはないが教室からでてきて私と夫にしがみついている。一方、ロシア戦士たちは保育所で鍛えられたので平気な顔で遊び、この機会に領土を増やそうと教室の一角におもちゃを積み上げていた。ほとんどの子供が教室外の親のところへ行ってしまう、保育園に通い慣れている数名の子供だけが教室に残っていた。

そして、驚くことにミラちゃんも！

「みて、ミラちゃん、残ってる…」私が言うと、夫も驚いていた。だがしばらくすると、積み木を持ったまま放心したように弱々しい足で教室の外に出てきた。ミラちゃんはお父さんと来ていたのでパパを探してるようだった。「あれ、ミラちゃんのお父さんは…?」。あるお母さんが「あ…、さっきボールにコーヒー飲みに行くって出て行ったけど…」と答えた。周りの親の同情するような視線がミラちゃんに注がれた。「…さすがやな、フランス人。子供がいても我が道をいくね…」。ちなみにミラちゃんのお母さんもフランス人、ミラちゃんは生粋のフランスっ子なのだ。

パパがいないのを確認したミラちゃんしばらく声は出さずに泣いた後、教室に戻り静かに着席した。私は双子に「ほら、ミラちゃんのところについて一緒に遊んできたら？」と言った。双子の1人が「うん」といってミラちゃんの側にいった。しばらく泣いているミラちゃんを見つめた後、「なんで泣いてるの？」と、バカでかい声で聞いたのである。「ああ…。そんなこと、そんな大きな声で…」ミラちゃんはさらにうつむきハラハラと泣いた。「なんで——??」さらに聞いている娘の横でほかの子が「パパがどっかいっちゃったから！！」とまた大きな声で叫んだ。子供たちよ、残酷だね…。お願い、そっとしておいてあげて…。

すると突然、アンナ先生が「はいー！！みんな、さあ、ここに来てー！ 飴があるわよ～」と最後の

切り札、お菓子で釣る作戦に出た。教室の外にいた子供たちも「lecca-lecca(棒付き飴)」の言葉を聞くと「！」と反応し、一斉に教室へ戻っていった。子供は単純である。すかさずアデレ先生が「みなさん、園庭で待機してください」と親にいい、教室の扉を素早く締めた。

親たちは園舎を出て、庭にあるベンチに腰掛けた。みな知り合って数日なので会話もぎこちないが、1人のお母さんが過去に上の娘をアンナ先生に見てもらっていたらしく、先生や幼稚園の情報を色々聞かせてくれた。今の新生のクラスがそのまま持ち上がり、先生も同じで三年間クラスメイトは変わらないこと、そして併設されている小学校にアンナ先生はちゃんと申し送りをしてくれるので、小学校側でもクラス分けに気をつけてくれるらしい。「とっても良い先生よ」とこの優しく頭の良さそうなお母さんの言葉でみなほっと安心した。やはり先生はとても重要である。特にイタリアは先生の質に大きな差があり、それが問題になっているほどである。良い先生にしっかり三年間見てもらえるのはここではとても幸運なことだ。親たちの間に一気に安堵感が漂い、数名の親たちは「私もミラちゃんのパパみたいにバールいってくるわあ〜」と出て行ってしまった。

それと入れ違いにミラちゃんのお父さんが帰ってきた。手には買い物袋。買い物してたんや、余裕やな。あなたの娘さん、この世の終わりみたいな悲しい顔して声を押し殺して泣いてましたよ…。ちなみにミラちゃんはいつもお父さんが迎えにくる。お母さんは2度ほどしか見たことがない。たぶんお母さんが会社で働いていて時間に縛りがあるからなのだろう。

1時間ほど経ち、そろそろ親が呼ばれる時間になったが先生は出てこない。ある親が「私、様子見てこようかしら…」と言ったが「先生が呼ぶまで待機していきましょう」ということになった。

待ち続け、さらに30分ほどたった頃、園舎の入口の扉が開いて先生と一緒に子供たちが飛びだしてきた。みんな口々に「ママー！！」「パパー！」と叫び、満面の笑みで親元へ駆けてくる。

それを見た瞬間、じんと今までにない感情が溢れてきた。一目散に親のところへ走ってくる我が子の成長した姿。つい最近までいつも一緒に

過ごすのが当たり前だった子供が「幼稚園」という小さな社会の中に出て行ったのである。他の親たちを見ても、がんばった子供たちに感動し抱きしめている。大げさかもしれないが、親から離れて集団の中で過ごすことができた子供の成長に親たちは驚き、その健気な姿に素直に感動したのである。イタリア人の親たちはありったけの褒め言葉を子供に浴びせ、包容しキスしていた。そして「どうだった！？楽しかった？」「お友達と遊んだ？」と親は興奮気味に子供に聞いている。

その感動の嵐の中、一番最後にプリンセスのように先生に手をひかれ、泣きながらミラちゃんができた。みなが目撃中、お父さんはミラちゃんに声をかけることもなく、軽くキスをすると手をつないでさささと帰っていった。

「あっさりしてんな…、フランス人…。」

親たちの感動の波がミラ親子により引いていき、明日からの親同伴無しの日々に備えるため、私たちも園を出た。

(元当館語学受講生)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

4/4(水)11:00～12:30

4/7(土)11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

4/2(月)19:00～20:30

● 大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

4/6(金)11:00～12:30

4/16(火)19:00～20:30

スペイン語 無料体験レッスン

● 京都本校：日本イタリア会館

4/7(土)11:00～12:30

「無限」

国司 航佑

本連載では、イタリアの天才詩人ジャコモ・レオパルディ(1798-1837)を、そして彼が生きた時代を紹介している。前回の記事では、彼の愛国詩「イタリアについて」を取り上げ、レオパルディの詩のうちに見られるイタリア国家統一運動(リソルジメント)の影響を考察した(2017年10月号)。だが、その際も述べたように、レオパルディ作品の多くはむしろ時代背景をあまり感じさせないものである。そこで今回は、彼の最も有名な詩とみなされる「無限」(*L'infinito*)を例に挙げて、そうしたレオパルディ文学の魅力の一端を紹介したい。

「無限」は、筆者の個人的な思い入れが強い作品でもある。私がこの作品に出会ったのは、大学3年生の頃だったと思う。当時授業を受けていたイタリア人講師が、この作品の素晴らしさについて熱弁していたことを今でも覚えている。しかし、その「素晴らしさ」の中身はいくら説明されてもよく分からなかった。

イタリア文化に関する勉強を続けているうちに、「無限」はイタリア文学史上最も愛された詩の一つであるということが分かってきた。様々なイタリア映画の中で、子供がこの詩を朗読するシーンを見た。私の友人に尋ねた時には、決まってみなこの作品を暗唱できた。感化されて、私自身もこれを暗記するまで唱え続けた。この詩の素晴らしさを理解したと確信するには至らなかったが、この詩を「素晴らしい」と感じられるイタリア人の感性を羨み、それに近づこうとイタリア語の勉強に励んだ。

「無限」は15行からなる短詩である。レオパルディは、故郷レカナーティでこの詩を執筆した。執筆年は、1818年あるいはその前年(彼が20歳前後の頃)と推定されている。私は、150年以上経った現代のイタリアで、この作品がいまだに愛され続けているという事実には驚かされる。現代のイタ

リアとは全く異なる世界(19世紀初頭のレカナーティ)で生み出されたこの詩に、現代の若者が共感を覚えるのはなぜなのか。そして、このたった15行を、高名な文学研究者たちが未だに研究し続けているのはなぜなのだろうか。



【レオパルディが「無限」を着想したと言われる丘】

以下にまず、「無限」の拙訳を掲げる。ただし、この日本語訳は意味を取るために作成したものであり、残念ながら鑑賞に堪えうるものにはなっていないことを断っておく。

私はいつも、この寂しい丘を愛した。
そして、最後の地平の大部分への
視線を遮るこの生垣を。
だが、座して眺めるとき、その生垣の
向こうの、果てなき広がり、人知を
超えた静寂を、そして深淵なる平安を
私は想像のなかに思い描く。
すると心はあやうく
恐怖に囚われてしまいそうになる。
目の前の木々の間に風の音を聞くと、
私は、あの無限の静寂をこの声に聴き比べ
てしまう。
すると、私には思い出されてくるのだ。
永遠、死した季節の数々、現在の
生きた季節、そしてその響きが、こうして
私の想像は、この広漠のなかに溺れる。
私には、この海の中の沈溺が甘美なものに
思えるのだ。

この短詩のテーマは題名が示す通り「無限」である。15行の詩句のうち「無限」を表現す

ることは、確かに困難を伴う作業だったろう。レオパルディは、レカナーティの丘から眼前に広がる広大な風景を見て《無限》を思い描いた。彼の独創性は、広大な風景より、自分の視界を遮る「生垣」に注目したところにある。視界を遮られることによって初めて無限を想像できるという単純な事実には、我々ははっとさせられる。《無限》の想像の中では、向こうから感じられる際限なき静寂と、ここにある風の音とが混ざり合う。想像上の《無限》は、海のように広く陰しくそして甘美だ。こうした単語の配列には、レオパルディ特有の天賦の感性を見て取ることができる。が、それだけでは「無限」の魅力は説明しきれない。その真の《素晴らしさ》を理解するためには、音声上のメカニズムを踏まえておく必要がある。

先程「無限」は 15 行からなる短詩だと述べた。この 15 という数字には、実は深い意味がある。西洋文学に通じている読者には説明不要だろうが、西洋社会に最も普及した詩の形式の一つに 14 行からなるソネットというものがある。ソネットは、中世イタリアに成立してから長い年月を経て世界各地に広まった、最も「成功した」詩形だと言っている。イタリア文学史においては、ソネットをものしていない詩人を探することは難しいと言っても過言ではない。それほどまでに、この詩形は広くかつ深く浸透しているのだ。ところがレオパルディは、ソネットをほとんど残していない。

ソネットは、全 14 行が 8 行と 6 行とに分かれ、それぞれ行末に脚韻が踏まれる、きわめて閉じた——あるいは完結した——詩形である。レオパルディは、その閉鎖性を嫌ったのだろう。ソネットの 14 行に 1 行を加えることによって、レオパルディはこの短詩を形式の束縛から開放したのである。そうすることで、文字通り「無限」の地平に広がっていくような印象が生まれた、とでも言えようか。こうした効果は、2 行加えて 16 行になったとしても、おそらく得られなかったものだろう。16 行は 4×4 に分解され、違う形で完結する余地を残すからである。だから、「無限」が 15 行であることには特別な意味がある。

しかも「無限」の 15 行は、韻を踏んですらいらない。以前、別の連載記事にて述べたことでもあるが(2015年11月号)、イタリア語の詩は、①1 行の

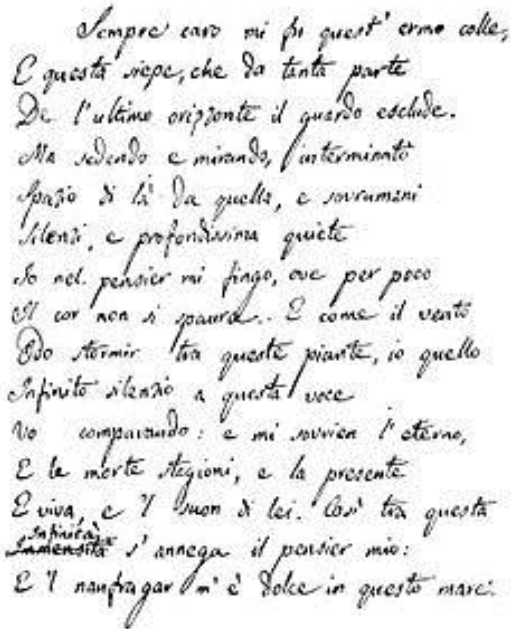
音節数を一定にすること、②脚韻を踏むこと、という 2 つの規則を守ることによって成り立っている。「無限」は、これらの規則をどの程度守っているのだろうか。以下にその詩行の原文を掲げて具体的に論じよう。

Sempre caro mi fu quest'ermo colle,	1
e questa siepe, che da tanta parte	2
dell'ultimo orizzonte il guardo esclude.	3
Ma sedendo e mirando, interminati	4
spazi di là da quella, e sovrumani	5
silenzi, e profondissima quiete	6
io nel pensier mi fingo, ove per poco	7
il cor non si spaura. E come il vento	8
odo stormir tra queste piante, io quello	9
infinito silenzio a questa voce	10
vo comparando: e mi sovvien l'eterno,	11
e le morte stagioni, e la presente	12
e viva, e il suon di lei. Così tra questa	13
immensità s'annega il pensier mio:	14
e il naufragar m'è dolce in questo mare.	15

まず規則②(脚韻を踏む)については、これが守られていないことを上に述べた。脚韻とは、各詩行の最後のアクセントが落ちる母音以降が同じ音になるように音を配列することである。例えば、第1行の《最後のアクセントが落ちる母音以降》は、“olle”となる。仮に、この行と脚韻を踏むとすれば、その行末には“olle”を含む単語が来なければならない(例えば、folle や molle)。が実際には“olle”で終わっている行は一つもない。同じ要領で他の行の末尾を見ていけば、「無限」が脚韻を欠いた詩であることが分かる。

次に、規則①(1行の音節数が一定)についてはどうだろうか。イタリア語の詩においては、隣り合う母音を併せて1つの母音のように発音する傾向がある(ちなみにこれは詩に限ったことではない)。そして、母音一つとその前後の子音によって構成される発音可能な音のまとまりを音節と呼ぶ。この定義はなかなか複雑で煩わしいものだが、ひとまずこの定義に沿って1行目を音節に分けると sem/pre/ ca/ro /mi/ fu/ que/st'er/mo/ col/le となると述べておこう。つまり 11 音節に分かれるの

である。そして同じように、2 行目、3 行目……と、順々に音節に分解していくと、「無限」の全ての詩行が 11 音節からなることが明らかになる(詳細は前掲記事を参照のこと)。



*Sempre caro mi fu quest'ermo colle,
E questa siepe, che da tanta parte
Di l'ultimo orizzonte il guardo esclude.
Ma sedendo e mirando, interminati
spazi di là da quella, e sovrumani
silenzii, e profondissima quiete
Io nel pensier mi fingo, ove per poco
Il cor non si spaura. E come il vento
Odo stormir tra queste piante, io quello
Infinito silenzio a questa voce
Vo comparando: e mi sovviene l'eterno,
E la morte stegioni, e la presente
E viva, e il suon di lei. Così tra questa
^{infinita} ~~limitata~~ ^{immensità} s'annega il pensier mio:
E il naufragar m'è dolce in questo mare.*

【「無限」の手稿(第2稿)】

出典: <https://it.wikipedia.org/wiki/L%27infinito>

さて、「無限」の各行を構成する 11 という音節数(これを《エンデカシッラボ endecasillabo》と呼ぶ)は、実はイタリア文学史上最も好まれた音節数でもある。ダンテの『神曲』もエンデカシッラボによって書かれており、先ほどから「無限」に対置させる形で言及してきたソネットもまたエンデカシッラボで作られる詩形である。つまり、音節数に関して「無限」はイタリア詩の伝統を逸脱するものではないとひとまず言ってもよい。「無限」には、11 音節という伝統と、無脚韻という非伝統とが、混在しているのということになる。

しかし、11 音節を守りつつ脚韻を踏まないという混交詩形は、実はレオパルディの発明品ではない。それはレオパルディの遥か前から存在する詩形であり、《解放されたエンデカシッラボ endecasillabo sciolto》と呼ばれている。だが、《解放されたエンデカシッラボ》は、脚韻をもたない西洋古典の叙事詩の効果を再現するために用いられることが一般的であった。その典型的な

使用例は、ヴァンチェンツォ・モンティやイッポーリト・ピンデモンテによるホメロスの叙事詩のイタリア語訳、あるいはフォスコロの叙事詩『奥津城 *Dei sepolcri*』のうちに見られる。叙事詩のような長詩にあつては、脚韻がなくとも、11 音節の詩句を積み重ねることによってリズムを生み出される。それに対して、たった 15 行の「無限」に見られる《解放されたエンデカシッラボ》は、リズムを生まない。

「無限」においては、さらに《句跨ぎ enjambement》という技巧が駆使されている。一般的な詩句においては詩行の区切りと意味のまとまりが一致しており、それが一定のリズムを生み出す。他方《句跨ぎ》のある詩句においては、詩行末に意味上の区切りがなく、それ故リズムにずれが生じる。「無限」の第 1 行と第 3 行とは意味のまとまりとしても完結しているが、それ以降は至る所に《句跨ぎ》が施されている。例えば、第 4 行の末尾と第 5 行の冒頭を見てほしい。「interminati spazi 果てなき広がり」は形容詞と名詞という意味上結びつきの強い組み合わせであるにもかかわらず、2 行に分かれてしまっている。これに似た例は、5 行目と 6 行目、9 行目と 10 行目、13 行目と 14 行目にそれぞれ見られる。

短詩「無限」は、完結した 11 音節の詩行に始まり、4 行目以降、無脚韻と《句跨ぎ》とによって解放されていく。そこから聞こえてくるのは、単調なリズムではなく流れるような美しいメロディーである。そしてその音階に沿って描かれるのは、視界が遮られたが故にかえって解放されたイマジネーションが無限の海に耽溺していく様子である。内容と詩形の間に見られるこうした一致は、にわかには信じがたいほどに完成度が高い。「無限」は何度読んでも新鮮な驚きを読者に与える作品である。

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>